



話題の本棚

川上未映子著『春のこわいもの』

アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著『アセンブリ 新たな民主主義の編成』

特集／大学生

新刊コーナー／新書コーナー／名著再読／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seiyo/public_relations/

わたしが揺るぐ季節

春のこわいもの

川上未映子著

新潮社



春のこわいもの
川上未映子

春になったからといって「わたし」という存在を更新しなければいけないわけではない。だが、周囲の環境が変わり、とかく挑戦を期待する社会の雰囲気は押しやられて、心身がしんどくなる時がある。川上未映子の新作は、日常の中で不意にわたしの輪郭が揺らいでしまう瞬間を捉えた六つの小説を収めた。穏やかな風にはそむ花冷えの気配にも似た、春のないませの感情が表現されている。

*

コロナ禍でマスクを着けているうちに、整形する人が増えているらしい。「あなたの鼻がもう少し高ければ」は、美容整形をめぐる物語だ。主人公の女子大学生トヨは、凡庸な顔立ちがずっと不満だった。パーツに手を加えれば、本当のわたしになれるのではないかと。整形の費用を稼ぐと、トヨが金持ちの男と飲んでギャンブルを得る飲み会を斡旋する女を訪ねる筋書きは、思いがけない展開を経て「顔って、なんなの？」という根源的な問いに読者を導く。

川上にとって整形といえは、芥川賞受賞作『乳と卵』や、それを発展的に書き継いだ近年の長篇『夏物語』が想起される。これらの作品がテーマとした母親の豊胸願望は、娘から「お母さんの人生は、わたしを生まなかつたらよかったやんか」との反発をまねき、いわ

ゆる反出生主義に向き合う主題につながった。一方、本作が取り上げた顔面の整形は、出産の話題には結びつかない。そのかわり、どこまでも操作可能な表面としての「わたし」という幻想のうちに、情報が入書きされ続けることのでかえってのっぺらぼうになってゆく現代社会の相貌が示唆されていた。

*

「もしかしたら明日、この生活のすべてをそっくり変えてしまう何か起きるかもしれない、とは思ったことあったかも。『夏物語』には、そんな台詞が登場する。『春のこわいもの』の収録作は、いづれも、新型感染症が世の中に波風を立て始めた二〇二〇年三月頃と思しき舞台設定だ。春の到来がただでさえもたらず不安は、災厄の兆しとあいまって、不穏さを増す。

「ブルー・インク」は一斉休校が言い渡される前夜を描いている。男子高校生が昼に女子生徒からもらった手紙を紛失し、二人で夜の校舎に探しに行く。「手紙は消えたんじゃない」「君が失くして、見つけれなかった」という彼女の言葉が印象的だ。いったん喪失してしまえば、取り返しがつかなくなる物事がある。コロナ禍の前の「日常」もまた、そうだったのかも知れない。病床にある女性が甘美な過去——「わたしがわたしの時代だったころ」——を思い出す別の日作と合わせて、読後の背筋が寒くなった。

T・S・エリオットが詠ったように、なるほど「四月は残酷極まる月だ」（西脇順三郎訳）。さて五月はどうだろう。空は青く、若葉の緑があまりにも鮮やかにきらめいている……。（投稿・島影）

二〇二六頁 税込一七六〇円 2月刊

中心なき権力、指導なき運動。

アセンブリ

新たな民主主義の編成

アントニオ・ネグリ、

マイケル・ハート著

水嶋一憲ほか訳 岩波書店



近年、社会運動の形態は大きく変わりつつある。どこかの政党や組織が計画する運動は影を潜め、呼びかけと問題意識が共有された名もなき人々の運動として人々は声を上げ集結する。また権力の側も変わりつつある。一部の政治家や資本家が権力を握っているという図式が見えにくくなり、グローバル資本主義の下で格差は隠されながらも深刻化していく。

こうした図式をいち早く提示したのは『帝国』（以文社）であった。それはかつての帝国主義とは違う「帝国」、グローバル資本と世界市場の中で見えない秩序を形成していく中心なき権力のメカニズムである。それは時に新自由主義と呼応していく。

このような帝国に抵抗する新たな運動をネグリとハートは『マルチチュード』（NHKブックス）と呼んだ。単一のアイデンティティを持つ民族でもなく、組織された階級でもない運動の形態は、多様性を含みながらも社会的生産の担い手と称称された。もはや世界の覇権を握るこの国が握っているとも言えない「帝国」の中で、どのような抵抗運動が可能なのか、その力半はマルチチュードにあると。そして『コモンウェルス』（NHKブックス）では、「帝国」によ

って搾取される「共有の富」について記述された。海も森林も水源も私有化され、人々が使う情報もコミュニケーションもデジタルプラットフォームの中では集積されながら取引に使われていく。帝国によって危機にある『コモンウェルス』の為に、再び運動の必要性が述べられたのだった。

では運動は成功したのか

以上がゼロ年代から描かれた「帝国」を巡る三部作の概要である。中心なき権力と指導者なき運動を書いた図式はその後の、アラブの春、エジプト革命、ブラック・ライヴズ・マターという実例の中で説得力を持つ。しかし運動は成功したのだろうか。多くの運動は失敗し、時により強力な独裁体制へと帰結した。どこに問題があったのか。そこに指導と組織を巡る、運動の反省点が浮かび上がる。指導者なき運動は持続力がなく組織化をしなかった。指導とは何か。本書『アセンブリ』は思想的に新たな民主主義を考察する本であるとともに、近年の社会運動の反省と発展を記述する本でもある。

ネグリとハートの面白さは理論的説明の精緻さにあるのではなく、最前線の運動に参加しながら、そこで直面する権力の問題と運動の模索を思想的に描いていく所にある。世界中のいたるところで人々は集結し自由への声をあげている。そこに共通性はあるのか、彼らは何と戦っているのか、そして運動の可能性はどこにあるのか。度々ニュースになるデモ運動をシニカルに見ている人も少なくないだろう。そんな人にこそ、本書は読まれてほしい。彼らは失敗の中で冷笑に陥らず、可能性を模索しているのだから。

（きもの）

（四九二頁 税込四九五〇円 2月刊）

光待つ場所へ

辻村深月著
講談社

自分のことをどんな人だと思っていますか。自分自身を、ありのまま受け止められていますか。

大学生ともなれば、もう「自分」について十分理解しているかもしれない。清水あやめもそうだった。自分は「普通の人」にはなれない。だから周りの話題についていけなくても、おしゃれが分からなくても構わない。特別な感性を持つ一握りの人間の、払うべき代償なのだ。藤本昭彦はいつも友達に囲まれている。みんなのことが好き。友人に向けた悪口には、例えその場だけのものだったとしても、決して同調したくない。

あるいは大学生には、まだ正面から向き合ったことのない「自分」がいるかもしれない。思い込んでいた自分像が崩れる瞬間。それは、唐突にやってくる。清水はコンクールに落選しても泣けなかった。誰かと待ち合わせをしているあの人を目で追ってしまう。私は本当に、絵の才能以外を望まなかったのか……？ 藤本は友達が帰るやいなや、「溜まり場」と呼ばれていた家の鍵をガチャんと締めた。もっと、孤独になりたい。世界の当事者になんか、なりたくない。

誰しも、傷つけられないように大事にしまっておきたい一面を持っている。その隠し持った自分と対峙すべき瞬間は、移り変わる環境や人間関係に揺すられて、ふとした時に訪れる。著者はその地味で鈍い痛みをめちゃくちゃに散らかしたくなって、でも後で片付けることを考えてしまう、中途半端な自分。結局、自分自身を生きていくしかないのだ。そのことに絶望したとしてもあなたは大丈夫だ。この本がきっと寄り添ってくれる。 (茫漠)

(432頁 税込836円)



特集

大学生

長かった受験勉強が終わって、晴れて私も大学生！ キャンパスの門をくぐれば、そこにあるのは別世界。老いも若きも、誰もが自由に探究していた。何を？ 青春を、学知を、世界の深部を——無尽蔵の喜びが、僕たちの胸を黄金色に満たしてくれる。だがその日々はあまりにも早く過ぎゆくだろう。ならば本を手にとろう。そしてまた大学生になろう。実際に受験もできるのだから。さて、あなたはどんな大学生生活を送りたい？

(ユキ)

スウィム・トゥー・バーズにて フラン・オブライエン著 大澤正佳訳 白水社

大学生活とはどんなものか。勤勉で活動的な学生たちが、和気あいあいとキャンパスで交流するような——いや、ちがう。主人公の「彼」は、父を亡くし叔父のもとでそれなりに良い暮らしを送っている大学生。いい机や椅子が用意されており、勉強するには申し分ない。しかし彼は部屋にこもり、勉強はろくにせず小説ばかり書く怠惰な大学生なのだった。

彼の書く小説は、小説家トレリスが小説を書くというあらずじだ。しかし、トレリスが綴る物語に不満を持ち始めた登場人物たちが、むしろトレリスを題材とする小説を書き進め、登場人物たちは自分の未来を変えていく。小説の中の小説の中の小説——。読者はアイルランドの神話世界から大学生の平凡な日常生活まで、読書を通じて体験できてしまう。また、このような入れ子構造になっている本書の構成以外にもユニークな点がいくつかある。本書には目次がないのに、ところどころが太字、更に箇条書きがなされている箇所がある。まさに実験小説である本書は、アイルランドの古典として必読である。

本書の魅力を特集に即しているならば、彼と叔父の描写であろう。叔父は敬虔なキリスト教徒で、ろくに勉強しない甥を哀れに思う。一方の彼も叔父に対して心の中で皮肉をいう。しかし、後に優等卒業生学位を手にした彼に、叔父は「並外れた幸せの表情と並外れた喜びの表情」を示す。彼は叔父に対してこれまで「小心、狡猾、他人の目への意識過剰」と考察していたのに対し、叔父の表情をみた後には「率直、善意の人。謙虚にして感傷的。」と叔父を描写する。親の心子知らず。大学生とはこんなものだろう。 (トントウ)

(350頁 税込1870円)



青が散る(上・下)

宮本輝著
文春文庫

大学生になった人たちが「青春」という言葉を聞くと少しむず痒いかもしれない。青春とは制服を着ていたあの頃で、自由とともに押し付けられた不自由を感じていた過去の姿なのだと。青さは常に振り返られるものであり、渦中にいるうちは感じられないのだろうか。

本書の舞台は大阪の郊外、茨木市に新設されたばかりの大学。その一期生椎名燎平は、何事にも受け身であった。入学するかどうか決めかねていた椎名は、洋菓子店の一人娘佐野夏子と出会うことで入学を決めた。一目惚れからはじまったキャンパスライフは常に成り行き任せであった。夏子としゃべる口実の為にテニス部に入り、新しい仲間と囲まれて新しい大学の新しい部活に有り余った時間とエネルギーを費やしていった。若者たちのスポーツと恋は、一瞬の煌めきを見せていく。

人はいつまでも青いままではいられない。新芽もいつの日か散らなくてははいけないように、可能性を抱いている若者もいつか可能性を背負った大人になってゆく。成長を望み、自らの未来を選んだ若者は、まさにそのことによって青さを喪っていく。「自由と潔癖こそ青春の特権ではないか」。いつか散ることが分かったうえで、自由とともにある潔癖とはどのようなものだろうか。

本書の出版は1980年代初頭。携帯電話が流行る前の懐かしい大学生生活だが、描かれる葛藤や喪失は今の大学生が読んでも共鳴する部分が多いただろう。恋もスポーツも学問も、これからの大学生の前には数多の可能性が開かれている。可能性の前に困惑しよう、そしていつか終わると知っているからこそ、この日々を咲かせていこう。 (投稿・なーが)

(上巻 320頁 税込704円)



最後の秘境 東京藝大 —天才たちのカオスな日常—

二宮敬人著 新潮文庫

東京藝術大学——上野にメインキャンパスをもち、音楽学部と美術学部で構成された芸大界の最難関。最も競争の激しい絵画科の志願倍率はなんと 14.5 倍。

こんな藝大に通う妻をもった著者が、体当たりで藝大生の日常に迫ったインタビュー録が本書である。同じ“大学生”ではまとめられない、破天荒でエネルギッシュな藝大生の世界にお邪魔しよう。

江戸時代に造られた絡繰り人形に魅了され、それを再現しようとする工芸科の学生。動きだけをヒントに、凶面もネジも全て自分でつくる。睡眠時間は 3、4 時間。彼を動かすのは、ただひたすらにものづくりが“好き”という気持ち。芸術が生きることそのものであると言う人も少なくない。特に印象的なのは、絵画科の女学生。キャンパスの中庭に時折現れる「ブラジャー・ウーマン」——上半身トップレスでブラジャーを仮面のように纏う正義のヒーロー——を演じる彼女にとっては、絵も身体表現も、徹底的に己を知り、己を極限までさらけ出すための場なのである。

その一方で、芸術を純粋に愛する者だけが集まっているわけでもない。練習漬けの日々に辟易し、音楽が好きになれなかった楽理科の学生。美術は「腐れ縁的な存在」だと口にする鍔金専攻の学生。芸術活動に対して肩の力が抜けた人も案外いるようだ。

とりあえず芸術云々ではなく、本当に彼らは面白いのだ。当然、教師陣も学生に劣らぬ変人っぷり。学園祭や輪祭といった祭りの様子にも抱腹絶倒間違いなし。読後には藝大生の自由な生き方や考え方が、我々“大学生”の視野を広げてくれていることだろう。

(はらん)

(355 頁 税込 693 円)

NHKによろこそ!

滝本竜彦著
角川文庫

なんか知らないけど怖くて怖くてしかたがな
いんだ。
だからもう、ダメなんだ——



NHK といってもあの NHK ではない。それは日本ひきこもり協会。面白いアニメを放送することでオタクのひきこもりを量産する悪の組織である。大学を中退し、ひきこもり四年目を迎えた佐藤達広は、不安と恐怖でがんじがらめの毎日を送る中で、ついに自分を陪れる陰謀の存在に気付いたのだった。しかし一体どうすれば？ 道行く主婦も会社員も、社会に潜む работникかもしれない。どうしよう。仕方がないから薬を飲み、酒をおおろう——そうして悶々とアパートの一室にて思考と時間を持って余す佐藤くん。ある日彼のもとに、奇妙な出会いが訪れる。

ゼロ年代にメディアミックス的展開を果たし、今も世界的な評価の声が止まない本作。表紙に描かれているヒロイン岬ちゃんの魅力がとにかく語られがちなタイトルなのだが、小説版の魅力は何よりも主人公の内的語りにある。ボーイミーツガールを仕向ける岬や、昔なじみの友人山崎との奇妙な交流と並行し、テキストの大部分を流れるそれは、時に実験的な手法を交えつつ、混沌の中に微睡む主体を現出させている。どこにも行けず、何もしない。過去形と独白によって進行する不安定な日常。その叙述は、陽気な大学生のネタでありながら、確かにモラトリアムの本質を抉り出し、読者の胸を締め付けるはずである。

成果によって生かされる人の世において、空虚さを愛でる時間は無意味かもしれない。だが、それ故に貴重でもあろう。(とよ)

(336 頁 税込 660 円)

大学生

アントン・チェーホフ著 イリーナ・ザウロフスカヤ絵
児島宏子訳 未知谷

チェーホフはある日、彼の創作への批判に対して、こう言い返したという——「僕がどんなペシミ



ストだと言うのです？ 自分の作品のなかで僕が一番好きな物語は、『大学生』なんですよ!」。チェーホフが最も好んだ自身の作品。チェーホフのなかで最も希望に満ちた作品。原文だとわずか数頁のこの掌編では、茫漠として捉えがたい人生の深遠さが語られる。

「大学生」というタイトルにもかかわらず、本書はいわゆる学園ものではない。また、神学大学に通う本書の主人公、イワン・ヴェリカポーリスキーは、まったく大学生らしくない。彼は、この世から悲惨が消えてなくなることは未来永劫ないであろうことを、暗く荒涼とした極寒の地、ロシアの片田舎を歩きながら憂える、そんな学生だ。彼に青年の快活さはない。彼にあるのは、老年を思わせる静けさだけ。だが、それがいいのだ。

彼はシギ狐からの帰り道、焚き火の傍らに二人の寡婦がいるのを見た。彼は二人に近づき、焚き火に手を翳しながら言った——「ちようどこんな寒い夜、使徒ペトロも焚き火にあたったのでしょうかね」。そして彼は、福音書の十二使徒伝から、ペトロがキリストを三度否認した出来事について語り始める。その話は、二人の胸を打った。何千年も前にペトロが抱いた苦悩を、二人はその身でじかに感じ取ったのだ。彼はそこらに、過去は現在にそのまま繋がっていることを悟る。何千年も前の出来事は、今を生きている私たちにも大きな意味を持っている。彼はそこに、人生の魅力、奇跡、崇高な意義を見出すのである。

人生の深遠さに思い巡らす大学生活、それもまたありなのではないか。 (ばや)

(64頁 税込 2200円)

テロール教授の怪しい授業

カルロ・ゼン原作 石田点漫画
講談社

大学一年生の春、新入生の読者諸氏もそろそろサークル新歓や履修登録も終わり学生生活に馴染み始めた頃だろうか。キャンパスでの対面授業も再開された。大学生活とは地元から離れるなど新しいことの始まりであり、新しい世界との出会いである。



本書の主人公もそんな大学一年生。オリエンテーリングの最中に怪しそうなサークルに声をかけられ、その場を助けてくれた先生のゼミのオリエンテーションを聴いてみることになったことになった。優しそうで綺麗なTAの人、同じ課題に取り組むゼミの仲間、この前のサークル勧誘では親切そうな相手に流されるままついていってしまいそうになった所を注意してくれた先生。流されずに自分の頭で考えることが大切だと言われた。確かにそうだ、この前の勧誘も流されたのがいけない、大事なアドヴァイスを貰えるここなら僕も変われそうだ、と彼には珍しく自分で決断してそのゼミに参加することにした。さて、初回の授業は……。

ちょっと気になるのは、京大の学生ならこの主人公のように流されるままふわふわと怪しげなサークル勧誘に乗るような人はいないということだ。自分の頭で考える習慣もついているはずだ。そう考えると本書の内容は読者諸氏には不適當な気がする。ただ、主人公のように気の優しい性格で、サークル勧誘を受けたりする中で困ったことのある人にはオススメのシリーズである。

新しい世界では怪しげな人もいる。ただ、それも怪しげなことがわからないと引っかかってしまう。わからない人は本書の「怪しげな授業」を受けるといいだろう。 (ねこ)

(第一巻 192頁 税込 715円)

新刊コーナー

われら

ザミヤーチン著
川端香男里訳
岩波文庫

本書を紹介するにあたりその内容とともに不運な境遇を語りたい。一九二〇年初頭に出版された本書は反ソ連宣言書という烙印が押され七〇年近くソ連の文学史にのることはなかった。では何が書かれていたのか。そこには計画経済が行きつく未来、合理性と科学が理想とするユートピアの悲劇が描かれている。そう、これはあの時代のソ連で描かれたもう一つの『一九八四』であり、もう一つの『すばらしい新世界』なのだ。

時代は二六世紀。世界は「緑の壁」に覆われ、「恩人」が支配する中で「単一国家」と呼ばれていた。主人公1・503は建造技師として宇宙船開発に従事する傍ら、「覚え書」として日々の記録をつけていた。本書はこの覚え書を読む日記文学として展開していく。かつての世界は古代文明と呼ばれ、野蠻と忌み嫌われていた。完全に時刻に沿って行動

し性行為まで厳格に管理される社会の中で、怪しげな女性I・330と出会ってしまふ。古代館で彼女と話すうちに、国家転覆の陰謀に巻き込まれていく。ここから主人公の日記は徐々に冷静さを欠き、記憶が曖昧になっていく。はたして狂っているのは自分なのか、世界なのか。その時国家が民衆に一つの病が流行っていると告知する。その病名は「想像力」。病を治すために全国民、治療を受けよ……。

全体主義の快楽、科学合理主義の恐怖、想像力という病。ロシアが再び戦争に向かう中、本書は今こそ読まれるべきだろう。(きもの) (三二二頁 税込一〇六七円 3月復刊)

ヒカリ文集

松浦理英子著
講談社

松浦理英子の待望の新作である。かつてある劇団に所属していた六人の男女が、同じく団員であった賀集ヒカリという女性との当時の関係を回想した文章が並ぶ。劇団の名前は「ニュー・トラジック・ラクーン」、略して「NTR」。その名の通り(?)六人

のそれぞれと次々に関係を結んだヒカリは、ファミ・ファタルの文学的伝統に連なると二応は言えるのだが、作中でも多数言及される(男性作家の手による)ヒロイン像達からは大きく距離をとっている。言ってしまうえば「普通」の人間として描かれているのだが、その人物像には息を呑むような不思議な光沢があり、回想者たちの筆も甘やかな快楽の記憶に満ちている。とはいえ、彼らの繰出す観察・皮肉・嫌みは絶妙というべき鋭さで、「この楽しさとせつなさがわからない人とは友達になれない」とつい言いたくなってしまふ。演劇や「文集」の設定をいかした、虚実が見定めがたい台詞回しや場面作りも魅力的だ。

個人的には、各々の回想のフィルムを彩る多様な音楽作品にも注目しながら読んだ。戦前の歌謡曲からR&Bまで、検索して聴きながら言外の意味を深読みしたりしても楽しい。なかでも重要なのがゲイル・ガネットの唄う「太陽に歌って」。自分のことをほんとうには愛してくれない恋人の記憶、しかしそれが陽光のように後々まで人生を照らし、温めてくれる。たとえ逸脱的と呼ばれようと豊かにちがいない人間関係のあり方をあくまで肯定する松浦の小説は、やはり貴重というしかないものなのだ。(投稿:ドフニ)

(二四七頁 税込一八七〇円 2月刊)

魂の形について

多田智満子著
ちくま学芸文庫

魂とはどのような形をしているのだろうか——見えないものの形を考えるなんて馬鹿らしいし、古臭い。そんなこと「未開人に任せておけ」と言う人もいるかもしれない。しかし、著者の多田は、魂について思いめぐらすことは、人々の抱く世界（宇宙）観を顕わにすることだと考える。本書は、魂を「見る」ことを夢想した詩人のエッセイである。

前半では、日本と中国における魂の形が考察される。古来、人間は魂を飛翔するものとしてえがいた。水陸空を自由に行き来する水鳥は、肉体を離れた魂とみなされ、孟蘭盆会の頃に現れる蛸は、現世に相霊が戻ってくる時節柄とその虫の神秘的な光が相まって、童謡や漢詩の中で、魂そのものとして詠われた。続いて、多田の目は古代ギリシア向けられる。ギリシア語の〈プシユケー〉は「魂」を意味する他に「蝶」とも訳される。ここで彼女は哲学者らの声に耳を傾けるなかで、蜜蜂や塵、猛禽類の姿をした魂を見る。

一方、古代エジプトの遺跡からは、魂の新たな形——階段——を見る。この階段（梯子）という表象を通じて、キリスト教圏を含む幅広い文化圏で、魂がまさに天と地の架け橋そのものと考えられていたと分かる。

文字や絵に託された様々な魂の形からは、「不可視のものに形を与える人間の想像力」の逞しさを感じる。そして、先人たちが残した痕跡をどこまでも追いつ、何とかして魂を「見よう」とする多田は、まるで純粹に好奇心に従う少女のようだ。評者はその姿に憧れを感じずにはいられない。（はらん）

（一九一頁 税込二一〇〇円 11月刊）

本を書く

アニー・ディラード著
柳沢由実子訳
田畑書店

次の言葉は、私に本に向かう理由をひたりに言い当てていくように思う。曰く、

「そこにありのままの美があるかもしれないという希望がないならば、また、人生が高揚し、その深遠なる神秘があらわになるのであれば、だれが文学を読むというのか」。私

はこれまでずっと、ありのままの美が、人生の深遠なる神秘が、そこに凝縮された一文を探し求めてきた。そしてそれは、本書の著者アニー・ディラードも同じなのだろう。

本書は、本を書くときの心構え、および文章作法や創作作法についてのエッセイ集である。著者は、ピューリッツァー賞を受賞したこともある、ネイチャー・ライティングの第一人者。その指南は手厳しいが、その分、とても役に立つ。たとえば彼女は、最も良く書けた文章、一番の核となる文章をこそ放棄せよと私たちに命じる。その文章が作品を弱めてしまうのであれば、たとえそれにどんなに愛着を感じていたとしても、私たちはそれを手放したほうがいい。名残惜しさなど関係ないのだ。だから彼女は言う——「数ある壁の中には支柱になる壁がある。そんな壁は取り除くことができない。（……）だが残念なことには、取り払わなければならないのは、たいへい支柱となる壁なのだ。彼女の創作に対する態度には強烈なものがあるが、おそらくそれは誠実さの裏返しなのだろう。

最後に、ミケランジェロが弟子に書き送った言葉を記しておこう。彼女もこれを引用している——「描け、アントニオ、描け、アントニオ。描け、時を無駄にするな。（ばや）

（二〇八頁 税込一五四〇円 2月刊）

美学のプラクティス

星野太著
水声社

その命名者である
バウムガルテン以来、
美／芸術／感性を考
察の対象としてきた



「美学」だが、本書はこの学問分野の現在を、崇高／関係／生命という三点から捉え直す。すなわちそれは、著者の星野が書き継いできた、この「美学」という営みに対する「ひとつの実践の記録」である。

本文はこの、崇高／関係／生命というテーマごとにそれぞれ三つ、計九つの論考からなる。たとえば第Ⅱ部「関係」の第五章では、「ソーシャル・プラクティス」の現状が論じられる。作品とその鑑賞者という二項関係を解体し、その間に生まれる「関係」を重視する、ニコラ・プリオー以来の「リレー・シヨナル・アート」。および、作品という最終的なアウトプットよりも、社会的現実へのコミットメントを重視する「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」。ここでは一見混同されがちな、これら二つの同時代的な潮流を、前者がそれでも物質的な作品の形をとろうとする

一方、後者においてその形式何如は後景に退き、それが社会的・倫理的によき実践であるか否かがその評価基準となっていることが、美術批評の観点も織り交ぜつつ指摘される。図版が適宜挿入されているとはいえ本文中、

アート作品からの引証は多く、読者は必要に応じてその文脈を補っていくしかない。ただしその一点を除けば、全編平易な言葉遣いで書かれた本書は、美学の専門家でなくとも大いに楽しめる一冊である。現在のアートワールドに踏み入る実践的な第一歩として、まずは手にとることを薦めたい。（投稿・東風）
(二三三頁 税込二七五〇円 12月刊)

教育格差の診断書

川口俊明編著
岩波書店



「教育」ほど、各人に一家言あるものもなからう。我々の時代にあつては制度化された教育と関わりなく生きることなどは

ほぼ不可能であり、これは換言すれば我々が皆教育の当事者であるということでもある。そのような教育の現代的状況こそが、各人をして

て一家言を持たせしめているのであろうが、その根拠がそれぞれの経験のみであるならば、それは砂上の楼閣に過ぎない。「冷徹な現状の把握」を志向する本書が位置するのは、そのような教育談議の対極である。

本書では西日本のとある自治体、仮称「いろは市」のパネルデータが分析される。パネルデータとは、「同一の対象を計測的に調査することで得られるデータ」のことで、適切に分析すれば被調査者の変化の要因が分かる。実際に、本書では、学校外での教育機会（第3章）、学習時間（第4章）、やり抜く力「グリット」（第5章）、学校への適応（第6章）のそれぞれにおける家庭環境要因と、それらの縮小における学校教育の機能不全が示される。また、統計分析の概観を示す第2章と、質問紙調査における「いじ加減さ」を検討する第7章は研究方法論としても参考になる。

このように、本書は一貫して実証的な実態の解明を目指す一方で、編者川口は学力の数値化や調査項目の目的化など、学力調査の「副作用」も指摘する。それでも、本書のような取り組みが続けられるのは、ひとえに、「本書の知見など過去のものになる」ほかに教育データが整備され分析されることを著者たちが願っているからに他ならない。（侯爵）

(二三三頁 税込三三〇〇円 3月刊)

手づくりのアジール 「土着の知」が生まれるところ

青木真兵著
晶文社



「アジール」とは時の権力や社会から逃げ込むことのできる場所。古来は宗教空間や自然環境が中心社会とは異なる原理を有する場所であったため、社会からはじかれた者にとっての「アジール」として機能していた。しかし、現代において中心社会の原理は様々な媒体を通して否応なしに生活に入り込み、人々の生活は市場の原理に従うことと引き換えの社会保障によって支えられている。いまや社会の外側としての「アジール」を想像することすら難しいのではないかと。

著者は今失われつつある「アジール」を自らの手で作り出すことを試みる。それが、市場が唯一の原理として機能する此岸と一本の橋で繋がれた彼岸の図書館である。著者の移住・私立人文系図書ルチャ・リプロ運営の経験を基に書かれた『彼岸の図書館』を背景に行われた様々な分野の専門家との対話とそれによって引き出された論者が本書には収められている。各人の専門分野だけでなく、プロレ

ス・寅さんといった社会の内と外を越境する事例と共に進んでいく会話は、討論というより研究室や喫茶店で交わされる会話のよう肩肘張らずに読むことができる。だが、一つの対話には幾つもの社会を見つめなおすためのエッセンスが含まれている。

地に足の着いた著者の視点は読者の、特に何かしらの違和感を持つ人の、学問や仕事に対する向き合い方に少なからず影響を与えるだろう。彼岸の図書館があるのは奈良県東吉野村、京都大学吉田キャンパスからは車で二時間の場所である。 (投稿・マサ)

(二五六頁 税込一九八〇円 11月刊)

ハンス・ヨナスの哲学

戸谷洋志著
角川ソフィア文庫



本書は、二〇世紀を代表するドイツの哲学者、ハンス・ヨナスの最良の入門書である。「未来への責任」をキーワードに、「未来倫理を中心としながら彼の哲学を再構成すること」、それが本書の狙いである。

ロシア軍が、ウクライナのチェルノブイリ

原子力発電所に武力攻撃を加えたことは記憶に新しい。幸い大事には至らなかったものの、もし武力攻撃が大規模な放射能汚染を引き起こしていたら……と考えるだけでも恐ろしい。その影響は、数百年、数千年、いやそれどころか数千年先まで及んでいたかもしれない。こうした事態が意味するのは次のこと、すなわち私たちは、テクノロジーの発展によって未来世代を脅かす力を手に入れたということである。そうである以上、私たちは、未来世代に対して責任を負わねばならない。

しかし、ここで問題が生じる。それは、まだ生まれていない未来世代に対してどう責任を取るかという問題である。未来世代が私たちを非難することも、また賠償を求めることもできない以上、私たちは普通の意味で責任を取ることができない——。こうした未来倫理の問題にいち早く取り組み、その解決策を提示しようとしたのが、ヨナスである。テクノロジーの問題を主軸とするヨナスの思想は、それゆえ、今日においても大きな意義を有している。本書は、その現代的意義を「未来への責任」という観点から鮮やかに浮かび上がらせた点において、啓発的である。

本書を読むと、ヨナスを読むべきはまさに今だということが感じられるだろう。(はや)

(二四〇頁 税込二〇五六円 3月刊)

愛について

アイデンティティと欲望の政治学

竹村和子著
岩波現代文庫竹村和子
アイデンティティと欲望の政治学

性別役割分業や男／女らしさといったものに違和感を覚え始めている人々です

ら、性欲望に関しては当たり前前のものとして踏み込まないのはなぜか。本書の支柱となるこの問いに答えるため、著者は異性愛という構図の虚構性を精神分析、法哲学、批判理論など幅広い学問的視座を用いて明らかにする。

本書は、大きく二部にわけられる。前半は、異性愛がいかに言語・法・社会によって構成された本能によって再生産されてきたか、また男性の性欲望がどのように正当化されてきたのかを述べる。対して後半は、愛の話からアイデンティティをめぐる政治に拡張していく。私的なものと思われる愛は、実は近代の制度化された秩序、つまり政治的・公的なものでもある。マイノリティの承認と差異という今なお議論される問題に、著者は普遍的あり方や自己と他者の連続性を捉えながら新たな政治を愛の構造から切り拓く。

著者によると、近代国家において人々は

「異性愛であること」を確固たるものにするために「同性愛でないこと」を強調してきた。また、性欲望は男性中心的存在である故に女性性は性欲望のない受け身の存在とされ、レスビアンは「正しい男性」に出会うことによって修正されると思われてきた。こうした同性愛の否定、女性のエロスの不可視化に著者は切り込み、本能と思われるものを覆していく。

二〇年経って、ますます人々の関心を惹きつけ遂に文庫化された本書。それは不確かで脆い愛に、誰もが自分の居場所の正しさを求めている証左でもあろう。(トントウ)

(四三〇頁 税込二七八二元 12月刊)

綴葉編集委員募集および
投稿募集のお知らせ

『綴葉』編集委員会では、編集委員を新たに若干名募集します。

仕事内容は、毎月二〜三本の書評を書くこと、毎週金曜日に行われる編集会議に出席して『綴葉』の編集作業に携わることです。編集委員には毎月若干の活動手当と、書評で取上げた書籍の代金が支給されます。

対象は、京大学生協加入者で大学院の修

了課程ないし医学部の五回生以上、そして右記の仕事を継続して行うことが出来る方です。この条件を満たし編集委員としての活動を希望される方は、本誌添付の読者カードに編集委員会への参加希望の旨を明記の上、生協のひとことポストに投函するか、『綴葉』表紙記載のメールアドレスへ直接お問い合わせ下さい。追ってご連絡差し上げます。

また、読者の皆様からの投稿も随時受け付けています。採用させて頂いた方には、書籍代(上限二五〇〇円)および薄謝を図書カードにて差し上げます。ふるってご投稿下さい。書評の形式は次の通りです。

①「新刊／新書コーナー」：新刊二〇字×三二行、新書二〇字×二三行。出版されてから半年以内の書籍を対象とします。

②「最近読んだ本」：三〇字×四二行。普段の読書の中で特に面白かったものを紹介、批評して下さい。刊行時期の制限はありません。二冊以上取り上げたい場合はご相談下さい。

いずれの場合も、書名・著者名・出版社名・総ページ数・発行年月・税込価格と投稿者の氏名・所属・連絡先・ペンネームを明記して下さい。郵便・メールどちらでも受け付けます。宛先は本誌表紙を参照して下さい。

(編集委員一同)

奈良で学ぶ寺院建築入門

海野聡著
集英社新書

寺院建築を訪問する際、一体どこをどう見れば良いのか分からず、もどかしい思いをした人は多いはずだ。そこでお勧めしたいのが本書である。建築史学者であり、古建築のツアーガイド経験もある著者による、いたれりつくせりの案内本。一冊リュックに放り込んで、お隣の県までプチ旅行をしよう。

序章を読むだけで、寺院建築の基本的な構成を押さえられる。構造上の制約の中、いかに大きく格式高い空間を作るか。寺に込められた人々の熱量と知恵を思い知らされる。その後は具体的な建造物の解説に入る。薬師寺東塔から軽やかさを感じるのは何故か？ 中世建築なのに古代らしさを感じる興福寺の秘密は？ 建築を見るのが数倍面白くなるような知識を、丁寧な図版と共に教えてくれる。この寺院建築の解説の親切さに関しては、どのツアーにも劣らないかもしれない。

建築の知識を学ぶことで、実物を見た際に感じた雰囲気の正体に気づき、一歩進んだ鑑賞ができる。建築を楽しむこと、素直な第一印象が重要であることは忘れずに。(荏漢)

(二五六頁 税込二一〇〇円 2月刊)

戦後民主主義

山本昭宏著
中公新書

政治思想や社会運動からジブリ映画の批評まで実に幅広く渉猟しつつ、「戦後民主主義」をキーワードに1945年から現在までを描き出す通史である。「戦後民主主義と総称される思想や態度は、戦後社会のなかで、どのように現れ、いかに人びとに受け止められてきたのだろうか」と著者は問う。そして、平和主義、直接的民主主義、平等主義を要素として挙げ、それらがどのように論じられ受容されてきたのかを詳らかにしていく。

そこで著者が着目するのは、戦後民主主義という概念の不定形な様態である。時代に応じてその内実は変化してきたし、それは賛否問わず受容においても同様である。自右両党の社会民主主義志向のもとで欲望追求型デモクラシーに堕したと西部邁が指摘したところの「戦後民主主義」は、他方では、経済的・文化的貧困の中から評論家になりえた理由として大塚英志が述べ懐した、教育や知の大衆化を実現した理念と実践でもある。本書を通じて、かくも不定形な「戦後民主主義」の二つの肖像を得ることができよう。(侯爵)

(三三六頁 税込二〇二二円 1月刊)

ホモ・エコノミクス

「利己的人間」の思想史
重田園江著 ちくま新書

人文社会系の学問では「人間とはどのようなものか？」と常に問われている。経済学においては本書の題名にもなっている「ホモ・エコノミクス」という人間像が、批判を受けながらも、長らく議論の出発点となっている。著者は、思想史の観点からこの人間像がどのように受容され浸透していったのかを批判的に検討している。決して褒められた行為ではなかった「金儲け」が富と道徳を巡る哲学的論争によって徐々に肯定されていく。一九世紀になると経済学は、数学や自然科学の考えを輸入することで学問としての科学性を纏うようになる。そうして二〇世紀にはその領域を経済以外にも拡張していく。こうした過程が多く思想家とともに論じられる本書は、学者としての著者の力量が遺憾なく発揮されている。

常に批判を受ける「ホモ・エコノミクス」という人間像が、それでも生き延びているのはなぜなのか。本書を読むことで、その片鱗に触れることができるだろう。

(三二七頁 税込一〇三四円 3月刊)

忘却された昔日の悲惨？——エンゲルス再読

先日家でSNS上では、タイサン5による漫画作品『タコピの原罪』が話題を呼んでいた。同作は心身を蝕む家庭で育てられた子ども達の物語であり、その過酷な悲喜劇的描写に多くの読者が引きつけられたのである。この出来事が、社会問題へと向けられた読者大衆の関心の証左である、とはとても言えない。しかし、格差が拡大し家庭内暴力が増加する昨今、このような作品がただ娯楽として消費され、忘れられるとも考えにくいのではないだろうか。

それは社会的殺人であった

社会問題が表象されるとはどういう事か。今回はエンゲルスの古典『イギリスにおける労働者階級の状態』（岩波文庫）を例としてこの問いに迫りたい。エンゲルスは、『資本論』の著者マルクスの盟友と言われる。その側面はかりが有名な彼だが、右に挙げた一八四五年の著作によって、弱冠二四歳で同時代人に多大なる影響を与えていた。父の工場があるマンチェスターを中心に、エンゲルスは産業革命の地イギリスを観察した。そこで見た労働者の窮状と、無数の資料を集約することで、彼は前例のない大衆貧困の全体像を書き上げたのである。



その非凡な点は、彼の表現力にあった。例えばエンゲルスは、富者と貧者の描写を繰り返し対比させ、両者のあいだにある不平等を印象付ける。光り輝く街の裏には悪臭漂う湿った区画。全身が不調をきたすような工場労働に女子供が搾取される一方で、彼女らが死ぬまで働き続けても得られない金銭を、品のいい紳士が一晩の賭博で使い果たしている。「じつに理不尽な状態である。身体健康、

精神の刺激、より素朴な官能の愉悅をあたえることのできる最高の享樂と、最大の困窮とが隣接しあっているのだ！」

エンゲルスの文章は最先端だった。詩人ハイネらが手がけた「旅日記もの」の流行に乗っかり、当時ドイツ語として一般化し始めていた「社会的」という語で、「社会的殺人」や「社会戦争」などの造語を次々と登場させている。つまり彼のテキストは、「バズる」要素が満載であったといえるだろう。

言葉に表し、議論に乗せることで

そう、エンゲルスの著述は読み物として魅力的であった。逆に言えば学術的には不正確であったというのが、今日の共通見解になろう。一八世紀イメージの無根拠な美化や、工業化と労働者の階級意識成立との因果関係など、疑問点は複数浮かぶ。では、結局彼の試みは虚構に過ぎなかったのか？ 時代を一九世紀後半に進めるとしよう。歴史学者の中村勝美によれば、この時代のイギリスにおいては、労働者家庭の間は生存し難い環境下にあった（『保護と遺棄の子ども史』（昭和堂）参照）。本格的な公的支援の拡充は二〇世紀以降まで待たれたという。しかしそうした政策実現の前段階として、当時の医師により衛生状態改善の必要が説かれ、女性団体からは、女性に家事育児の責任を押し付ける歪な構造が指摘された。こうした議論のさらに前段階として、エンゲルスは社会問題に光をあてる役割を担ったのではないだろうか。

近代イギリスを巡る議論には、現代にも通じる部分が多くある。社会は鈍重な歩みで変わりゆく。しかしその微々たる変化は、悲惨を憂う人々が遺した、たしかな痕跡の結果なのである。（つとむ）

ウクライナとは？

3月号で『同志少女よ、敵を撃て』を紹介した。この作品中に主人公の少女セラフィマが狙撃兵となる過程で入学した訓練学校の同期生で因縁の相手ともいえるべき少女が登場する。ウクライナ出身のオルガだ。少しネタバレをしてみると、オルガはソ連の思想警察側のスパイであり、同期生たちの身辺調査と監視のために入っていたのだ。彼女がセラフィマを扇動しようとして述べた言葉に「ウクライナの誇りのため」というのがある。ロシア民話の中ではウクライナのコサックが悪役として登場するという説明もある。何故ウクライナはロシアからこのような見方をされるのか？

まずは『ウクライナを知るための65章』（明石書店）を読むとウクライナ地域の概要を知ることが出来るだろう。クリミアやドンバス、オデッサなど主要な地域・都市



の説明、複雑な人口形態、豊かな資源、多様な文化的バックグラウンド、日本との繋がりに至るまで様々な要素が網羅的に記されている。印象的なのは、ゴーゴリやプロコフィエフなどロシア文化の一人に思われる人物がウクライナ出身であることだ。ついロシアと同一視されそうなウクライナ。そして「ウクライナの誇り」は何故隠れて話されねばならないのか。それについてもう少し深く見ていこう。

そこで紹介したいのが『物語ウクライナの歴史』（中公新書）である。ウクライナの地を中心に繁栄した部族は遠くスキタイ人にまで遡る。ヘロドトスやルキアノスの歴史書にも逸話の残るこの地域は人々の行き交う先進的地域だったのだ。やがてここにキエフ・ル

ーシ公国が築かれる。「モスクワがまだ森だった頃にキエフは既に都市だった」的な話もあるように文化的な起源はウクライナ地域にあった。この公国がモンゴルの侵入によって瓦解した後、この地域はリトアニア・ポーランドなどに分割されて統治される。

東西から侵入した他民族が支配者として

統治する一方、ウクライナを郷土とする人々は農奴として抑圧され困窮する。それに抵抗する形の一つがコサックといえるだろう。時に支配層への反乱者でもあり、時に支配層のために戦う傭兵でもあったコサック。毒にも薬にもなるこの存在の精神が発揮された局面について最後に紹介したい。『マフノ叛乱軍史』（風塵社）はソ連成立に至る過程でウクライナに起きた大規模な叛乱を分析した書である。ロシア革命でボリシェヴィキが権力を握った際、農地が国家管理になることに失望したウクライナ農民の不満を汲むマフノ率いる勢力は、帝国復活を企てる白軍を蹴散らしながらボリシェヴィキの赤軍とも戦つことになる。結局マフノ軍は敗走し、ウクライナはソ連邦へと組み込まれていく。だが、自らの土地に対する愛着と、支配の手を伸ばしてくる周辺を頑強に拒む彼の戦い方は歴史上何度も繰り返されたコサックの反乱の再来であり、オルガの言う「ウクライナの誇り」を体現するよう思われる。

支配者の意を汲むような姿勢を見せつつも、態度次第で別の勢力についたり反乱を起こす不穏分子。権力側のスパイとして動いていたオルガも、上司からはそんな風に見られていたかもしれない。

弱いながらも強かなウクライナはこれからどうなるのか。(ねじ)



編集後記

今年度から編集委員を務めさせていただきますはらんです。

葉蘭^{はらん}は笹のような葉をもつ植物です。お寿司の下に敷かれているのを目にしたことがあるかもしれません。多年草であるうえに、乾燥や日陰にも強いタフガイです。そんななの、呼び名は“はらん”——今にも散ってしまいそうなかよわい響き。

私が葉蘭を知ったのは小学4年生のとき。一緒に習字を習っていたおばあさんが、教室の庭に茂っていたその植物を手いっぱい手折ってきたのです。「おにぎりを包んだり、お刺身を置いたりするのよ。」大きくて固そうなこの葉が、食材を包むためにしなり、目を悦ばすために使われるなんて……。葉蘭を目にする度、墨と青くさが入り混じった香りとともに、その時の感慨を思い出します。

何もできないまま、あっという間に修士2年生になってしまいました。情けないことに本を読むのは遅いし、文章を書くのも下手。それでも、綴葉と読者の皆さんと一緒に成長していければと思っています。日々不安に苛まれる昨今、葉蘭のような力強さと、他者を包み込むしなやかな優しさをもって生きていきたいものです。(はらん)

当てよう！ 図書カード

青緑の葉をつけた木々、濃い水色の空、太陽や土の匂いから、もう夏に近づいていることを気付かされますね。

今回の特集では、大学生活がテーマでしたが、文豪たちのなかで、中等科時代に二度落第したのは誰でしょう。

1. 志賀直哉
2. 芥川龍之介
3. 内田百閒
4. 川端康成

(トントウ)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは6月15日です。



《1・2月号の解答》 1・2月号の問題の正解は、1. のバيبレードでした。ちなみに2002年には、同号の特集でお話いただいた平野啓一郎さんの歴史小説『葬送』が単行本化されています。図書カードの当選者は、naoさん、ヤキトリさん、天の川さん、スミレさん、中嶋イルージョンさんの5名です。ご当選おめでとうございます！ (とよ)

読者がらひひひひ

○京大作家インタビュ어가面白かったです。作家の方の大学時代の話は、共感できる部分があつて親近感を感じました！

(法科大学院・大三元)

—— 今回の特集にご協力下さった平野啓一郎さんからは、本当に多くのお話を聞くことができました。一委員として、感謝してもし切れません。編集を担当した委員によると、泣く泣く活字にできなかった内容も沢山あるそうです。京大生として、作家としての平野さんを知ると、彼の作品のちょっとした場面の新たな読み方が見つかるかもしれませんね。

○京大作家インタビュ어가面白かったので第二弾以降も楽しみです。(農・スミレ)

—— ご感想まことにありがとうございます。

委員だけではなく、生協各店舗の方々とも連携して行われた今回の試み。こうして好評の声を聞けるのも、皆様方のおかげです。次回のインタビュ어도お世話になりますが、何卒よろしくお願い申し上げます。(と、ここに書かせて下さい)。次は何方のお話が聞けるか、予想しながら楽しみに待っていただけると幸いです。(とよ)